

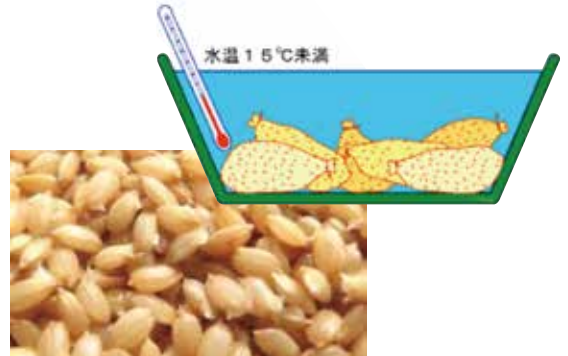


健苗づくりに向けて

育苗期間は気温が大きく変化することもあり、ハウスの温度管理と水管理が大切となります。昼間の高温や夜間の低温に気を付けましょう。基本技術を守り、根張りのある良い苗で米作りをスタートしましょう。

浸種・催芽

- ①浸種は屋内または日陰でおこない、直射日光等による急激な水温の上昇がおきないように注意しましょう。また、外部からの異物混入を防ぐため容器には蓋(ふた)をします。
- ②浸種水温は10℃～15℃未満で行いましょう。低水温(5℃以下)は発芽率の低下を招き、高水温(15℃以上)は、ばか苗病の発生リスクを高めます。
- ③催芽温度は30℃～32℃とし、温度計を必ず設置し確認をしましょう。



育苗管理

- ①育苗期間中ハウス等の温度は、出芽時(30℃～32℃)、緑化期(昼:20～25℃、夜:10℃以上)、硬化期(昼:15℃～20℃、夜:5℃以上)を目安とします。温度が高いと「ばか苗病、もみ枯細菌病、苗いもち病」の発生リスクが高くなるので、温度管理を徹底しましょう。
- ②温度計は、苗箱付近の高さに合わせて設置し測定しましょう。



育苗中のかん水

- ①緑化以降は、根の呼吸も活発になります。この時期にかん水量が多いと、床土が過湿となり根の呼吸が妨げられ、マット形成が不良になります。育苗初期は、午前中に1回充分にかん水します。
- ②育苗後期には、1日1～2回を目安にかん水を行います。夕方のかん水は、温度低下や徒長苗となるため避けましょう。風等で育苗箱の隅が白く乾いてしまう場所は、その部分だけかん水することがポイントです。



排水溝の点検と 生育の状況を確認しましょう!

①気象および麦の生育状況

12月下旬からの降雪により積雪がありましたが、草丈は平年より短いものの、茎数・葉数については、平年並みで推移しています。ほ場の溝について、融雪後に排水ができていないか点検や補修をし、湿害の発生を防ぎましょう。また播種時期により生育に差があるため、各ほ場に応じた管理をしましょう。

②収量確保に向けた管理

①排水対策

排水不良による湿害は、収量・品質の低下を招きます。明渠に滞水している場合は溝さらえ等を行い、速やかに排水しましょう。



排水溝がふさがっており、溝さらえが必要

②施肥(大麦・小麦共通)

●分施肥系の場合

2月下旬～3月上旬に窒素成分で3～4kg/10a程度実施しましょう。

●全量基肥施用の場合

茎数が十分確保できているほ場(茎数400本/m²以上)では、追肥の必要はありません。

ただし、分げつ不足(茎数400本/m²未満)の場合は、2月中旬～下旬に窒素成分で1.5～2kg/10a程度追肥してください。

茎数 400本/m²以上の
大麦ほ場(例)



追肥不要

茎数400本/m²未満の目安



大麦

小麦

2月中旬～下旬に1.5～2kgN/10a追肥